

ル/タ、テイルの意味機能試論：認知文法 の見地から

樋口 万里子

0. はじめに

英語の過去形には、日本語のタ形が対応することが多い(Jo came yesterday に対し「ジョーは昨日来た」等)が、疑問が解けて合点があった場合等、英語では Oh, I see 等と現在形なのに対し、日本語では「あーそうか、わかった」とタ形を使う。又、Ron came before Jo came は「ジョーが来る前にロンが来た」であって、「*ジョーが来た前にロンが来た」とは言えない。タの使用原理はどうなっているのだろうか。「わかった」は、I understand に当たることもあれば、I understood に相当することもある。更に日本語では、「わかる」や「わかった」、「わかっている」を使い分けるが、英語の I understand はこの3つの形全てに、場合により対応可能である。この日本語の3種の表現の違いは何だろうか。

ル/タ、テイルについては、先行研究において、様々な例や用法が分類・列挙されているが、この疑問への答は示されていない。用法や例文の説明に使われている「過去、完了、アスペクト」等の概念にしても、輪郭がどうも不明瞭である¹⁾。疑問解消への活路を見いだす為には、何らかの発想の転換が必要の

1) 英語でも、現在形と言われる形式が、どういう意味で現在なのかをきちんと捉えていないと、現在形が、未来のこと(He leaves tomorrow)も、現在のことも、過去のこと(This guy comes to me yesterday and he says he wants a loan)も、太古の昔から未来永劫にわたること(The sun rises in the east)過去から未来にかけての曖昧な期間のこと(The ball is on the table)も、それこそ何でも表すように見え、收拾がつかないことになる。本稿では英語の現在形は、発話時瞬間、話者の現実¹⁾に当てはまることを表すと考える。又、日本語のルは、英語で言えば will を使って表現する内容も表すので、この意味でも英語の現在形とは異なる。

様に思われる。

本稿は、この現状の打開に向け、認知文法の概念的道具立てを用い、英語の時制・相のシステムと比較しながら日本語のル/タ、テイルについて考察し、1) ル/タの対照を捉えるには、英語の場合の様な、発話時を軸とした時制観からの脱却を図る必要があること、2) 認知文法で提唱されているアスペクト関連概念の精緻化によって、テイルとルの共通点と相違点のかなりの部分が捉え得る、という2つのことを示そうという試みである。1) は、英語の現在形・過去形が、ground predication (即ち、ground [話者の時間的空間的場面的位置] からの物事の位置付けを担う記号) の一種で、コトが発話時、又はそれ以前に当てはまることを示すものであるのに対し、日本語のルやタの意味には、「発話時」という軸が含まれないと仮定すれば、言語事実に符合するのではないか、とにかく、タは事態の成立を後に、ルは途中又は前方に見せるという、方向性のマーカーであり、視点は発話時という固定的時点に限る必要がないものと考えてはどうかという提案である。英語でも日本語でも、情報伝達において ground は意識されるものではあるが、動詞を構成する形態素の意味に、必ずしも内在する必要はないのではないか、という発想である²⁾。2) は、アスペクトや structural/actual 等の概念規定を明らかにしつつ援用し、英語の単純形/進行形とル/テイルを比較し、テイルというのは、一点では捉えられない時間的幅を持つ動作や変化を、テという連結語でイルという状態と結び付けて、「その途中又は後の状態」という形で、ある点的な視点で捉えるデバイスだと論じる。

2) ground predication には冠詞等も含まれるが、日本語には、それも必須ではない。冠詞で表わされている内容は、日本語でも表そうと思えば表せるが、なくても構わず、日本語の code の中には、ground からの位置付けが必ずしもなくていいという傍証になるだろう。冠詞と時制は日本人が最も苦手とする文法項目だが、それは ground からの位置づけという部分が、日本語の code の意味に内在しないからであろう。

尚、ここでル形と称しているものは、先行研究の呼称に習い、ルで終わる動詞だけでなく「書く」「使う」等も含み、終止形のままで物事を表す形を代表したものである。辞書のエントリー的な終止形等、抽象的な場合は、「書く」という動詞、という呼び方をする。

1. ル／タ形式の意味機能：方向性の標示

「ル、テイル、タ、テイタ」は、一般に日本語の時制とアスペクトの主な表現形式とされ、タに関する主な分析では、タは、「過去、完了、ムードのいずれか、又は全部」の意味を持つとされている。しかし、多くの場合、過去や完了、ムードとは何かということについての、明確な規定のないままに議論が進められており、それらの意味は、例文によって示されるのみで、高木（1993）が指摘する様に循環論的であり、不明瞭であった。これらが「英語の過去形、完了形相当、又はその他」という程度の曖昧な意味で使われているとすれば、問題であろう。英語の過去を表す形態素の意味は、日本語の言語形式の意味には直接には含まれない、ground という発話者の時空上の位置という独特の概念の意識を、不可欠な要素として成り立っているからである。又、英語の完了形や進行形が表す事態は、日本語で表現しようとする、実に様々な形を取る。これら英語の形式の理解には、アスペクトについての明確な概念理解が必要である。これらが曖昧なままに、その呼称をそのまま使って、別のシステムを持つ日本語の形式を議論しても、せいぜい、たまたま一致する例と、多くの例外が目に見える様で、あまり得策ではなさそうである。

日本語のル／タ形と英語の現在／過去形の違いが、最も顕著に現れるのは、(1)の様な前後関係を示す従属文や、小説の地の文(2)、(3)においてであろう。(2)や(3)を英訳する際、もし仮にル形に英語の現在形、タ形に過去形を単純にあてたとしたら、英語としてはとても理解不能な文章になる。従って、日

本語の小説ではルタ混交でも、英訳されると時制は一貫したものにならざるを得ない。

- (1) Ron came before Jo came. ジョーが来 { * た / る } 前にロンが来た。
 (2) 六月の、重たく湿った昼下がりがだった。風はなく、澀んだ空気が街から活気を奪っている。

額に吹き出た汗を指先でおさえ、笙子は、眉をひそめて歩いていた。一歩踏み出すたびに、靴があたる。足の甲に食い込んでずきずきと痛い。ためしに立ち止まってみたが、痛みはおさまらない。表通りに出たところで空車を探したが、こんな時に限って、どの車も客を乗せている。

パンプスのとがった踵で、地面に線でも引くように足をひきずりながら、笙子はまた歩き始めた。踝から下が熱をもって疼くような鈍痛と、歩を進めるたび、踵や爪先を走り抜けていく刺すような痛みとふた通りがあった。立ち止まると鈍痛が増し、歩き始めると刺すような痛みが増す。白い麻のスーツの裏生地が、汗を吸って、背中にべたりと貼りついている。歩道橋の昇り口の手摺につかまって、笙子は片方の靴を脱いでみた。

(「靴を脱ぐ女 冒頭部」『パラレル』落合恵子・改行位置変更及び下線は筆者)

- (3) 陸橋の上で、伊木一郎は立止つて、眼下に広がっている日暮れの街に眼を向けた。毎日、この時刻が彼の出勤時間だ。そして、毎日彼は橋のうえに立止つて、街を眺める。 (『樹々は緑か』吉行淳之介・下線は筆者)

このこと自体は随所で指摘されているが、この相違の原因を、納得できる形で説明したものは、筆者の調べた範囲では見つからなかった。工藤(1995)は、「現実の発話行為の場へのアクチュアルな指向性を切り捨てた時、フィクションの文学的テキストが成立する(工藤:1995:20)」と述べ、小説でル/タ混交になるのは、小説の場合と普通に話す時とで、テキストのタイプが違うからだと言う。日本語の場合だけを考えれば、そうかもしれない。だが問題は、何故英語の場合は小説でも基本的には時制に一貫性が必要で、日本語ではル/タ混交が可能か、つまり、何故日本語の場合は、発話行為の場への指向性の切り捨てが可能で、英語ではできないのか、ということにある。又、発話場面への指向

性がある場合でも、従属節では「前」の前ではル形、「後」の前ではタ形が義務的である。この現象については、主節は絶対テンスで、従属節は相対テンスになりうるというのが、従来の説明の主流の様だが、何故そうなるのかについても、解明されていない。

英語の場合、non-modal に限れば、基本的に節の内容が、発話時に当てはまることは現在形、それより前のことは過去形で表すので、発話時という軸の意識が不可欠である。それに対し、(5a)の「行く」は、発話時より時間的に前なのにル形で、(5b)は以後の事態なのにタ形が用いられ、とにかく「前」の前はル形、「後」の前はタ形が義務的で、日本語のルやタの使い分けは、どうしても「発話時を軸」としているとは言えず、英語の時制とは違った原理に基づいている様に思われる。

(4) a. I got that job done before I went to the supermarket.

b. I am going to the supermarket sfter I get this job done.

(現在既に決まっている予定の場合)

(5) a. 銀行に行く前にその仕事を片付けた。

b. この仕事を片付けた後で銀行に行く。

「時」の前では、ルノタの両方が可能だが、寺村(1971:253)でも指摘されている様に(6a,c)の従属節は移動の前、(6b,d)では移動後の時点から、動作を見ている。発話時点から見れば(6a,b)の従属節はいずれも以前、(6c,d)は以後の事柄であるので、英語では(6a,b)はどちらも過去形で、(6c,d)はどちらも現在形となり、同じ内容を伝えるには、動詞も変えないと表現しにくい。(7a)は「行く」途中の意であり、(7b)の主節の行為は「行く」という動作の達成後のことなので、ル形は使えない。

(6) a. 日本へ来る時、友達が空港まで来てくれた。(When I left LA,)

b. 日本へ来た時、友達が空港まで来てくれた。(When I came to Japan,)

- c. 日本に帰る時、電話を頂戴ね。(When you leave for Japan,)
- d. 日本に帰った時、電話を頂戴ね。(When you reach home,)
- (7) a. 京都へ行く時、神戸に寄った。(九州を出発して)
- b. 京都へ{*行く/行った}時、清水寺に寄った。

この様に、ルやタが発話時に無関係な例を念頭において、タを「完了」とする説もあるが、前述した様に、「完了とは何か」ということについて概念規定しない限り、説明としての意味は余り無い。少なくとも英語の完了形の表す事態は、日本語では様々な形に対応する。又、タの説明に際し、完了と過去を明確に区別した文献も、先行研究には見当たらない。

そういった中で、国廣(1976)は、曖昧な「過去」という言葉を廃し、「実現」という言葉を使ってタの意義素を<客観的にある事柄がある時点において実現した状態にあることという不定人称者の判定を表す>とし、ルを<ある事柄が確実であるという不定人称者の主観的判断を表す>と規定しており、興味深い。こう考えれば、過去の動作や状態(さっき来た)や、過去に表現した変化の結果状態の持続といった完了的な意味(お腹が空いた)ムードの意味(買った買った)をカバーできるだけでなく、前、後、時、等の前の位置における制約や、小説における、タ/ルの混交現象にも何らかの説明が付きそうな可能性もある。しかし、この説でも、いわゆる状態動詞の「いる/ある」等は説明できない。「子供がいる」や「お菓子があつた」というのは、どう考えても「確実なこと」というよりは、「既にも実現している状態」であろう。日本語では、状態動詞は極少数派で、殆どが変化・動作動詞なので、殆どの動詞については当てはまる、とは言えるかもしれない。だが、「ている」や「である」を「ていた」、「であつた」に対するものとして、ル形に含めるとすると、例外として処理できるものでもないだろう。「ある」に対して「あつた」、「いる」に対して「いた」の持つ回想的な意味も捉えられないと、ル/タの区別を捉えているとは言

えない様に思う。勿論、状態動詞のタ形を回想、動作・変化動詞のタ形を實現と分けてもいいが、「お腹が空いた」も、昨日の事を表す回想的な場合もある訳で、實現と回想という言葉の意味の峻別が必要となり、これまた厄介である。

上記に述べた、いくつかの例や問題を鑑み、本稿では、日本語のタとルというのは、視点が、発話時とは限らず、事態の見え方だけに関っているのではないかと考えてみる。タは、ある一纏まりの事態の實現（又は生起）全体を、後方から見たイメージであり（つまり實現している）、ルは、事態の一纏まりを前方、又はその内側から眺めるイメージである（事態が既に始まっていたり、確実なものとして前方にある時点）。即ちその様な方向性を指示する形態素ではないかという仮説を立ててみたい。図示すれば、次の様な具合である。

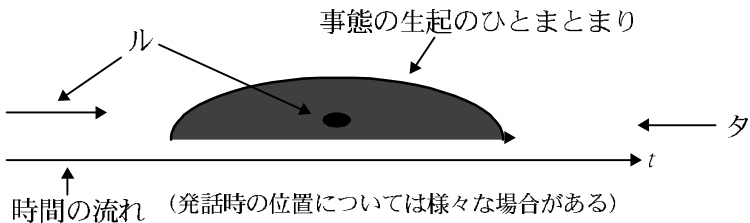


図1

後方から見て一纏まりの事態と見て取れるということは、その纏まりが完結的であるにしろ（e.g. 円を描いた、タマが死んだ、2時間走った）、未だ続いているかもしれない場合にしろ（e.g. {その時/ずっと}そこにあった）、その表現対象の纏まり自体は、その視点から見れば終わった事である³⁾。だから「昨日3キロ走った」や「もう御飯食べた？」等の様に、発話時点から見て過去に成立した事態であることも当然ありうる。昨日の出来事も、行為自体が完了している場合も、（つまり英語で言う過去や、完了の一部（Have you eaten?）等）動詞で表される事態全体が、視点より後ろにあるからである。発見のタと

言われる「あ、あった！」というのも、発見という成就・達成を表しているのではないだろうか。「あ、ある。何故こんなとこに？」等という現状把握とは異り、達成が後方にあるイメージである。「昨日からここにあったよ」というのは、昨日の段階で状況として成立していた事態に関する記憶を問題にしている、「昨日からここにある」は、現状把握であろう。

「或る時点から見て」ということは、視点と事態との位置関係だけが問題なので、従属節の場合は、視点が発話時である必要はないということになる。従って「来る時/前」では、事態が前方に見え、「来た後/時」では、視点の後ろに事態がある。又、英語では現在形で言う I'm hungry が、日本語では「お腹がすいた」とタ形になるのは、「お腹がすく」は、「(すいていない状態からすいている状態への)変化」を表す動詞で、変化の実現を言うことにより、間接的に現在の状態が表現されるからであり、過去に起きた変化(胃の検査で朝食抜きだったので、昨日の昼はお腹が空いた、等の場合)の場合と同様、変化の全貌を後ろから見るからだと考えられる。「どいた、どいた！」や「買った、買った」等は、少し粗野な命令口調の表現と言われているが、「買う」という動作が表現したイメージをそのまま伝えて、相手に押し付ける感じがするからだろう。発話時から見たのであれば、「買った、買った」の動作の実現(するとすれば)時点は、未来の筈だから、夕が、発話時から見た過去という時間的位置を表すのではない、という証拠の一つにもなるだろう。

- 3) 一纏まりのありかたというのは、動詞の種類によって色々ありうるが、基本的には、動作や変化の始まりから終わりまで、達成や成就、完結を意味し、瞬間動詞の場合は、その変化が起きることそのもの、「走る」等の動詞の意味自体には特定の完結点がない activity verb の場合も、走りはじめて走り終わるまで、と考えられる。状態動詞等変化が感じられないものは、取りあえずイメージの中で捉えた纏まりが実現したイメージである。ここで実現と言っているのは、default 的には現実になっているものだが、日本語では現実と非現実を言葉の上で厳格には区別しないので、未だ現実起きていないことや、起きるとは限らないこともタ形を取りうる(死んだら骨をあの丘に埋めてくれ、一億円が当たったら、株を始める、等)。又、一個の1回の現象だけではなく、幾つかの同じような動きがまとまったものを一つと考える場合もある。

タが動作の生起や状態の一纏まりを後ろ向きに眺めたイメージであるならば、動作の実現自体は、発話時から見れば、未来の場合も過去の場合もあって当然である。「後」の前の位置ではタが義務的であることは勿論、小説等で、ルやタが混交するのも、至極自然な現象ということになるだろう。英語の小説では、語り手は顕在的であるにしろないにしろ、或る確固とした時間的位置において、話が展開する。振り返る形で語っていれば、一部の特殊な技法の場合でない限り、時制は基本的に一定である。英語の時制は発話時を反映するものだからだ。しかし、日本語では、語り手の位置というものがあるにしても、言葉の上には現れず、語りの時点は物語の展開と共に移動可能だ。例えば、タで時間の進展を表現し、ルやテイルで或る時点での付帯状況や予定を表す事が多い。要するに、ある程度固定的な発話時を軸とした英語の時制と異なり、日本語のタやルは、可動的視点から、事態を後ろ向きに見せたり前向きに見せたりするものなのであろう。換言すれば、基本的に、タは動作を後から、ルは、動作をその途中から又は前向きに見る時点に、視点を誘導するマーカーだと言えるだろう。例えば、(8a)は天気がいいという事態の途中の視点から、その状態を見ており、(8b)では散歩も終えた時点から振り返って見ている。又、(9a,b)では、「来る」という動作は、(9a)では前方にあるものとして、(9b)では後方に置いた視点から実現しているものとして見ている。英語では発話時が軸となっているから、(8)(9)a,bいずれの場合も、従属節は過去形となる。

- (8) a. 天気がいいので散歩した。
- b. 天気がよかったので散歩した。
- (9) a. 姪が遊びに来るので御馳走を作った。
- b. 姪が遊びに来たので御馳走を作った。

2. ル/テイルと英語のアスペクト

さて、ここまでは、ルとタの対立のみに話を絞ったが、「わかった」や「わかっている」と「わかる」の意味の違いに踏み込むには、テイルとの対照においてもルを考えてみる必要がある。

2.1. テイルに関する先行研究の問題点

テイルに関する先行研究では、テイルという形自体が、アスペクトを表すとするものがある（奥田：1979、工藤：1982、1995等）が、このアスペクト自体も、明確には規定されていない。例えば工藤（1982、1995）は、ルは完成性、テイルは継続性というアスペクトを表すと論じる⁴⁾。これは、Comrie(1976)が、英語の進行形という形式は（tautological に）（継続相の一種の）進行相というアスペクトを表すと述べているのと同趣旨であろう。「歩いた、目を覚ました、汚れた」は動作を完結的に描くのに対し、テイル形では、「動作の継続」(10a) や「変化の結果の継続」、「単なる状態の継続」(10b,c)を表すので、テイルを継続相と考えている様である。

(10) a. 廊下を先生が歩いている。(c.f.歩いた)

b. 赤ちゃんが目を覚ましている。(c.f.目を覚ました)

4) 実際には、工藤（1982、1995）では、「スル」と「シテイル」という言葉が使われ、その「スル」は「テイル/テイタ」に対する「シタ」も含めたものを表している場合がある。定かではないが、「ル」だと「スル」とは違って「イル」も含まれるため、「イル」等を除外し、動作や変化の動詞に限って論の対象とする意図で「スル」が使われているのかもしれない。更に（後述する意味での）アクチュアルな変化や動作を表す動詞に限り、完結性というのを、本稿で言う「事態の全貌」と同様のものと解釈すれば、「スル」に関する工藤の観察は、本稿の主張と相いれないものではない。しかし、「イル」等を除外する理由や必然性については説明がないし、後述するように「シテイル」が継続なら「イル」や非アクチュアルの「スル」も継続だと思われるので、本稿では、継続性が「スル」に對立する「シテイル」の特性とは考えていない。又本稿では、以降「ル」で「イル」も「スル」も含め「タ」と對立させた意味で、議論を進める。

c. 玄関が汚れている。(c.f.汚れた)

しかしながら、工藤(1982、1995)の提案は、動作動詞の一部については有効だが、「鳥は飛ぶ」の様な、彼女が「非アクチュアル」と範疇化する事態については、例外的扱いが必要である。又、「非アクチュアル」でなくても、「いる」や「ある」の様な、いわゆる状態動詞の場合は説明できない。工藤(1995)は、「鳥は飛ぶ」の様な文を「超時的質規定文」と呼び、テンスアスペクトの分化がない文と言うが、それが何を意味するのか、又、その理由については、説明していない⁵⁾。テイルを「継続」と言うならば、「いる」や「ある」も、状態の継続であるから、継続で、「鳥は飛ぶ」も、general validity が継続しているので、継続の一種とも考えられる。Comrie(1976:25)の分類でも「いる、ある」は継続の一種である。そうとは言えない理由は、少なくとも工藤(1982、1995)には見当たらない。そう考えると、継続性というのは、ルに対するテイルの意味というよりは寧ろ、ルとテイルの共通部分ではないか、つまりルとテイルは、确实未来の動作のルの場合を除けば、どちらも継続性を有していると言った方がいいのではないかと、とも思えて来る。テイルというのは、もともとテとイルの組合わさった形であるから、テイルとイルとただのイルに何らかの共通部分があったとしても、そう不自然ではない。少なくとも「完成性」と「継続性」という概念だけでは、「わかる」と「わかっている」や「思う」と「思っている」の違いは判然とはせず、継続性は両方に関りうる概念と考えられるのである。

さて、説明に使う個々の概念的道具の輪郭が不明確なままでは、これ以上議論が進まないの、掘り所とすべき何らかの中核的概念を定める必要がある。

5) 注4で述べた様に、工藤(1982、1995)はスルとシテイルを分析対象としており、スルというアクチュアルな動作や変化を表すものだけが念頭に置かれ、アクチュアルの「いる」等の状態動詞や非アクチュアルの場合については考慮の対象外としているのかもしれない。ただ、そうしなければならない理由については触れていない。

そこで次に、少し角度を変えて、定義が明瞭で分かりやすい認知文法のアスペクト概念を概観したい。

2.2. 認知文法におけるアスペクト対立の定義

認知文法では、アスペクトとは、簡単に言えば動詞とその周りの要素等で作られる事態のイメージの区別である。まず、動詞と名詞との違いは、名詞は(その単語だけでイメージが捉えられるという意味で)自立語で、時間に関係なくイメージできるのに対し、動詞は(主語や目的語などの概念が判って初めて具体的に意味がイメージできる[e.g. 兎が走る、電線が走る]という点で)非自立語であり、時間が流れることにおいて認知できるというところにある。動詞は動作や変化、状態等を表すが、本稿ではこれを纏めて事態と呼ぶことにする。事態には、大きく分けて、時間の経過において<変化が認識できるもの>と<そうでないもの>という二種類がある。前者は perfective、後者は imperfective と呼ばれ、これが認知文法でいうところの、アスペクトの二項対立である。図示すると以下の様になる。

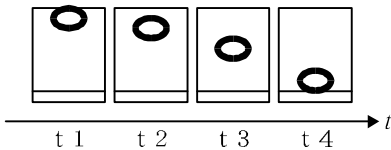


図2 perfective(It fell)

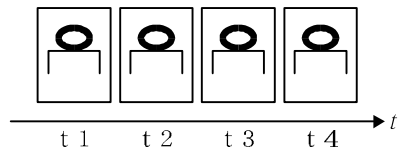


図3 imperfective(The ball is on the table)

perfective に「完了相」という訳語をあてると、別の概念である「現在完了」等の「完了」と紛らわしいので、取りあえず perfective という英語の形でアスペクトの話を進める。imperfective は、学校文法でもお馴染みの言い方をすれば、「状態又は stative」と呼ばれているものに近く、呼称としては、どちらも

一長一短ある。imperfective の方を採用する理由は、「状態、又は state」という言葉では、イメージ対象があまりに概念的に広く、曖昧になりがちで、ここで問題とする「変化の意識の有無」によるアスペクト対立を、一貫性を失うことなく明確に捉えるには、imperfective の方が、どちらかといえばより弊害が少ないからである。Langacker (1987: 254) も言う様に、状態(state)というのは、それ自体でも名詞でもあり、言葉だけでは形容詞が表すものとの峻別が難しく、動詞だけの側面ではないとも考えられる。又後述する様に、「変化の意識による一時的な状態」や、「状態の変化そのもの」は「変化が意識される」ので、状態でない方(perfective)に属する。それを、一時的にせよ、状態には違いないのに、そうでない方に入れるのは多少無理がある。更に状態動詞というのは、動詞の分類上のイメージが強すぎて、紛らわしい面もある。

perfective は、説明対象や必要に応じ、変化のあり方の種類を捉えて accomplishment, achievement, activity (Vendler: 1967) 又は変化内部の局面等を捉えた inchoative, durative, terminative, iterative 等と更に細分類化することもできる。これらのアスペクトや類似概念については、これまで様々な文法学者によって、微妙に異なる用語が少し違う意味で使われたり、定義が曖昧なまま用いられたりする等、混乱を招きやすい現状があったが、Langacker の認知文法の枠組で提唱された、簡潔でしかも目配りの利いた「変化の意識の有無」による定義により、かなり輪郭が明確になったと言えるだろう。

この imperfective/perfective というアスペクト対立は、英語ではこれまでも進行形との関りにおいて多く議論されてきた。進行形の表す事態の認知イメージを、単純形との比較において捉え記述する為に有用な概念だからである。例えば、(11a)は、「一冊の本を書く」という、始まりと終わりの区切りが意識できる完結的行為の全容を表すという意味で「完結的」(perfective)であり、(11b)は、「動作が進行中で完結していない」という意味で未完結相、進行相、継続

相等と呼ばれることもある。

(11a) He wrote a book.

(11b) He was writing a book.

しかし、これは、進行形が、be + V-ing という複合形で、主動詞は状態を表す be 動詞なので、全体としては V が表す動きや変化の途中の「状態」を表すからであって、進行形の特徴の或る一面を捉えたに過ぎない。(11a)や(11b)は過去形だからこそ完結的 / 未完結的という対照が見て取れるのであって、「単なる状態」と「動作や変化の途中の状態」という違いはあれ、現在形の場合、全体では単純形も進行形も、いずれも既にいつからか始まっていて現在継続している「状態」であり、未完結で imperfective である。(12a)は或る具体的な一纏まりの動作の途中の状態であるが、(12b)や(12c)は、動作というよりは、主語の属性を示しているという意味で状態であり、(12d)と似た様な意味で使われる。(12b)、(12c)では、頻度や習慣的行動をより具体的に表し、(12d)では作家という属性が表現されている。状態にしても、いつか始まっていつか終わるのであるが、その始まりや終わりは、この場合、描写の対象外となっている。これは過去形にした場合も同じである(12e)。

(12) a. He is writing a novel.

b. He writes a novel a year.

c. He writes novels.

d. He is a novelist.

e. He was a novelist.

f. He { used to write novels/used to be a novelist }

c f. He wrote some novels.

又、be+V-ing の V は動作や変化を表し、状態を表すものは生じ得ないという別の側面からも、アスペクトは議論されてきた。これは次章で詳述する様に、

「状態」という概念をきちんと定義しさえすれば、間違いではない。だが、(13b) や(13c)で分かる様に、V-ing の V が perfective でありさえすれば、進行形として常に容認可能な文であるとは限らない。又、進行形だけが、ここで問題としているアスペクトの対立に関する構文という訳でもない⁶⁾。例えば、seem to の to の後に続く動詞句も、imperfective な事態でしかない(13d,e)。従ってアスペクトと進行形という形そのものは、別個の概念と考えるべきである。

- (13) a. He was writing a letter at 6 o'clock yesterday.
 b. *He was writing a book at 6 o'clock yesterday.
 c. *It was raining for 2 hours. (Mittwoch: 1988)
 d. He seems to be writing a letter now.
 e. *He seems to write a letter.

とはいえ、進行形は、試金石とは言わないまでも、アスペクトの対立と非常に密接に関っていると見てよいだろう⁷⁾。次章では進行形の V-ing の V の位置の動詞のアスペクトの輪郭を捉えてみる。

2.3. 状態動詞の典型イメージと imperfectivity

英語の単純形で見ると、imperfective な事態の典型例としては次の(14)、perfective な事態例としては(15)、が挙げられる。

- (14) a. He is a student. It is very cold now. It's 8 o'clock sharp.
 b. He loves her.

6) (Mittwoch: 1988) は、(13b) がおかしい理由について、「本を書く」という複雑な作業と長い時間を要する行為の一部として、「昨日の6時」という様な、瞬間的時間を考えるのが不適切だからであると言っている。(13c) が変なのは、進行形は、雨が降り始めて終わるまでという、1回の現象をその途中のある時点から眺めるので、その現象事態の時間的幅を表す2時間という副詞と合わず、その場合は It rained for 2 hours となるべきだからである。この理由については、imperfective な事態の特性として後で触れる様に、点で捉えうという事が関係している様に思われる。seem to が imperfective のみに結びつくのは、「ある点で捉えた状況に対する把握」を表すからであろう。

- c. I want them all.
- d. She thinks that movie is good.
- e. I see a dog over there.
- f. John resembles his father.

(15) a. It fell off.

b. I read it.

(14)に登場した動詞は、一般に「状態動詞」と呼ばれるもので、(15)の fell, read 等が It was falling や I was reading it 等の様に、進行形でも用いられるのと異なり、一般に、進行形にならないとか、なりにくい等と言われている。

(16) a. *It is being cold now.

b. *He is loving her.

c. *Tom is wanting the apple.

d. *Your sister is thinking that movie is good.

e. *I am seeing the dog. cf. I see a dog.

f. *John is resembling his father.

ところが、様々なところで指摘されている様に、同じ動詞でも、変化や行為を表すことがあり、そういう場合であれば、進行形 be + V-ing の V の位置に生起できる。

7) 本稿の議論の中心は進行形ではないので、本文からは割愛するが、進行形には他にも様々な現象が観察されている。例えば、() は always と共起して、いわゆる「苛立たしさ」を表すとされる進行形と言われているが、ここで言っている進行形のメカニズムとアスペクトとの関係で、説明可能である。基本的には、その人物を認識した時には、いつも現に動作の途中であるかの様な言い方でその人物を特徴付けている文だと言えるだろう。() の例を挙げて、大江(1982)が指摘する様に always と共起しても、常に「苛立たしさ」を表す訳ではない。He always complains... と単純形と言うよりは、動的であるがゆえにより強烈なニュアンスが副次的に出てくるだけだろうと思われる。

() He is/was always complaining about the weather.

() He is always differing with his fellow teachers.

() She is always giving people little presents.

() My grandmother was always forgetting things.

- (17) a. He is just being friendly.
 b. The French doll she was loving wore an exquisite powdered wig.
 (Truman Capote; Oye: 1982)
 c. In a moment, if I stay, I'll be wanting to kiss you.
 (Sherwood Anderson; Oye: 1982)
 d. I am thinking of going to the movies tonight.
 e-i. They are seeing around the school.
 e-ii. Mike and Beth are seeing each other these days.
 f. John is resembling his father more and more these days.

(17a)は、主語で指されている人物の、その場での態度や行為を描写しており、恒常的性質や属性を表す He is friendly とは意味が異なる。同様に、She loves the doll と言えば、主語の人形に対する心情を述べているが、(17b)の was loving は、例えば人形を撫でて可愛がる等の行動を表現している。(17c)は具体的な行為を示唆している訳ではなく、気持ちは気持ちであるが、I want to kiss you は気持ちの存在状態を表すのに述べ、(17c)の I'll be wanting to kiss you では、衝動的に沸き起こってくる動的なものが感じられる。(17d)は、あれやこれやと考え判断する行為の途中である。(17e-i)は見えている状態ではなく、学校の見学会などで、目に入るものを色々見て動き回っているし、(17e-ii)の seeing はデートを繰り返す行為を一纏まりにしている、その途中である。(17f)は、度合いの変化を表している。

この様に、love は「状態動詞」、等という様な分類の仕方は、動詞を文や使用の場から切り離れた典型的なイメージについてなされたもので、あくまで便宜的であって、デフォルト値によるものでしかない。それに対し、ここで問題とするアスペクトというのは、使用における意味的イメージであり、動詞句の纏まりが、或る発話（談話）状況において表す内容のイメージの区別である。

即ち、(17a-f)の主格補語の下線部分の動詞は、アスペクトとしては「変化が意識されるもの」である perfective であり、(16a-f)の例が非文だとされるのは、主格補語の内容に、変化を意識させる要素が見て取れないからだと説明できる。

状態動詞として分類されているものの中には、この様に文脈からの支えがないと動的イメージと結び付き難いものや、(18b)の様に比較的結び付き易いものがある。

(18) a. { This/Her chile } soup tastes great.

b. He is tasting the wine.

(18a)が表すのは、今味わっている、あるいはいつも彼女が作ってくれるスープの属性であり、この taste は imperfective である。それに対して(18b)の主格補語は、舌の上を転がして様々な部位の味蕾に全神経を注ぎ、吟味しつつ味わうという行為を意味するので、この場合の taste は perfective である。

又、動詞の中には、surround や wind の様に、文脈から切り離れた典型的イメージは特に perfective と imperfective とも一概に言えないものがある(19)。

(19) a. This road winds through the mountains.

b. This road is winding through the mountains.

c. An empty moat surrounds the dilapidated castle.

d. *An enemy moat is surrounding the dilapidated castle.

e. The SWAT team is surrounding the dilapidated castle.

(19a-e)は Langacker(1991)からの例だが、彼自身も説明している様に、(19a)は、例えば地図を見ながら、曲がりくねった道の全体像を一度に見渡しつつ、地形を説明しているイメージで、時間の経過における変化はなく、imperfective である。それに対し(19b)は、その曲がった道を、例えば車で走ったり指で辿ったりしながら、次々に変化する情景がイメージされ、perfective な事態の途中

と考えられる。(19c)は廃虚と化してしまった城の周りに要塞が取囲む様に残る、静的な情景(imperfective)で、変化の一部とは考えにくく、(19d)は容認されない。それに対し、(19e)では、機動隊という、動き回る人間が城を包囲しているイメージで、見ている時には必ずしも動いていなくても、動き、すなわち perfective な事態の途中と考えられる。

それから、動詞の基本的なイメージは動的だが、習慣や一般性、規則性等を表していて、一種の状態、即ち imperfective と見なせる場合もある(20)。

(20) He walks to school everyday.

imperfective な事態の典型例は、いわゆる「状態」なのであるが、「状態」という言葉に頼るより、「変化の意識の有無」という規定によってアスペクト概念を捉える方が、より広い範囲の現象に対し、より明確な区別が可能である。それは次に見る「一時的な状態」と「状態」の違いをも区別する。

2.4. 「一時的な状態」と「状態」の違い

例えば live という動詞では、(21)の様に、単純形、進行形の両方が可能だが、一般的には単純形の場合は永続的状态、進行形では一時的な状態を表すと説明されている。

(21) a. John lives in Tokyo.

b. John is living in Tokyo.

(21b)の場合、前節(17a-f)で見た様な例とは異なり、live で表されている内容そのものは、直接的には変化や動作とは見なし難い。確かに(21a)と(21b)を比べてみれば、(21b)の方が一時的な感じはするが、一時的にせよ状態は状態ではないか、だとすれば状態でも進行形になれるではないか、と言えなくもない。「状態」という言葉にはこのような問題も生じる。又、「一時的」という言葉の意味も曖昧である。例えば(21)は留学生の話かも知れず、(21a)の事態は

必ずしも永続的である必要はない。(21a,b)はどちらも物理的には同じ期間と
いう場合もある得し、逆に(21b)の事態の方が、(21a)より長くても構わない。
要するにイメージの仕方の問題である。

そこで、perfective/imperfective という「変化の意識の有無」による識別が
活きてくる。事態の期間がどうであれ、(21a)では「別の場所から来て別の場
所へ行く」という「動きや変化」は意識されておらず(imperfective)、(21b)
では意識されている(perfective)。変化の意識によって、副次的、相対的に一
時的な感じがするだけで、物理的な時間の長短は、本質的には問題ではない。
変化の意識の有無による識別によって、進行形の主格補語をなす動詞のイメ
ージを、perfective という一貫した概念で捉えることが出来る訳である。

perfective には、「開始と終焉という区切りがある」という側面もあり、
Langacker は一連の著述で、boundary (境界線) の存在を perfective の最も重
要な側面とする。しかし、世の中の全ての物事には、厳密に言えば、永遠はな
い。地球が存在するのも、太陽が輝き続けるのも、あと50億年くらいだと言わ
れているから、The sun rises in the east の様な事態も、いつかは終焉を迎
える。He is a student もせいぜい数年であるだろう。It's 8 o'clock に至っ
ては一瞬に過ぎない。しかし、これも、気づいた時には既に8時で、8時でな
くという変化を意識しない表現である。要するに、客観的に bounded かど
うかというよりは、話し手が変化を意識するか否かである。境界線の意識とは、
変化の意識でもある。と言って、The earth is revolving around the sun の
話者が地球の公転の終焉を意識していると言っているのではない。この場合、
例えば、理科室の宇宙の模型やテレビ映像で、モデルの地球の動く様子、即ち、
時間の流れにおける認識対象の位置変化における一時点捉えている。

imperfective とは、状態の開始や終焉という変化も動きも、描写の対象範囲
として意識しないということである。I know him というのは「知らなくなる」

ということが考えにくい事態なので、perfective なイメージで捉えにくい動詞である。勿論、He's knowing her more and more という変化が感じられるので、marginal ではあるが、perfective な意味で理解することができる。以上がアスペクトに関する概念規定のあらましである。

2.5. 英語の進行形のみカニズムとアスペクト対立の関係

以上の所で、perfective/imperfective というアスペクト対立は、進行形とは独立した概念で、変化の意識の有無によって規定でき、進行形との関りでは、be + V-ing の V の位置に生起するのは perfective だけだということを見た。ここで気になるのが、何故 be + V-ing の V の位置には imperfective は生起しないのかということだろう。それについて、Langacker は、「進行形は、perfective process を imperfectivize する構文で、imperfective が進行形 be + V-ing の V に生じないのは、既に imperfective なものを imperfectivize する必要がないから」と言う。即ち、進行形というのは、V-ing で捉えた変化を、その内部即ち途中の視点から眺め、全体を中和して be 動詞に結び付け状態化した、全体としては imperfective な表現なのである。これは Comrie その他の学者達の進行形観を踏まえた、構文のみカニズムの説明として納得できる。しかしそれでも、そもそも「何故何の為に perfective を imperfectivize するのか」という疑問は残る。その原理を掴まなくては、perfective を imperfectivize したものである進行形と、もともと imperfective な単純形(e.g. vs. He is living in London vs. He lives in London)という2種類の imperfective 表現の存在意義を説明できない。

本稿としては、端的に言えば、perfective を imperfectivize しなければならぬのは、perfective は一点では捉えられないからだと考える。perfective は、何らかの時間的幅がなければ認識不可能だからだ。dis、stop、finish 等や(反

復でなく1回の) flash の様な瞬間の変化などの現象も、それを認識して言葉にする時点では終わっているのだから、単純形では、過去形でなければ捉えることが出来ない。但し、事態の内側、即ち途中の状態として状態化すれば一点で捉えることが可能となり、それが現在進行形という訳だ。一方、もともと imperfective な事態は、金太郎飴の様に均質で、任意の一点の事態の全容を捉えることが出来、現在形で表現できる⁸⁾。例えば、He is a student はわざわざ「その途中」という言い方をせずとも、既に現在という一点において、当該の事態が継続中である。過去というのは無限なので、過去形では imperfective も perfective も表せるが、現在は点だから現在形は imperfective しか表せないというアシメトリーがある(樋口:1996、1997、1998)。更に、現在進行形の主動詞が、be 動詞、即ち imperfective であるのと同様に、現在完了形も、動作の何らかの影響が今に及んでいる、現在の状態を have で表したもので、これも全体では imperfective である。現在というのは、要するに現在の瞬間的時点であり、現在形とは、その一瞬の点で捉えうる事態を表すので、現在形で表された事態は結局全て imperfective なのである⁹⁾。

このあたりの原理やアスペクトの定義は、日本語の現象を捉える足掛かりとなり得る様に思われる。以上を踏まえた上で、先ず英語の進行形と単純形との相違に照らし合わせ、日本語のテイルとルの関係性を捉えてみたい。

3. ルとテイルについて

前述した様に、工藤(1982、1995)の表現を使えば、テイル形は 動作の継続や、 変化の結果の継続、 の派生である 単なる状態、等を表す。英語で

8) Langacker(1987b)では、imperfective は本質的に輪郭を持たないので、boundary がなく、一点でみても幅広いスコープで見ても、どこをとっても同じと見なすことができるという点で、不可算名詞とパラレルなものと説明されている。

9) Higuchi(1995)参照。

は、それぞれ進行形や完了形、又は単純形（例えば be 動詞 + 形容詞）等が表すものに似ている。 、 は、標準語では同じ形だが、(22)～(24)に示した様に、鹿児島を除く九州や四国・中国の西部地域の方言では、違う形式を取り、かつ が の派生ということには、 が と同形であるという裏付けもあり、英語の形と比較する際にも有用で、この分類を念頭におく意味はある様である。

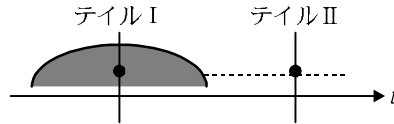


図4

福岡県南部 博多弁

- (22) a. 聞いてくれるの？聞いてるよ。(聞きよるよ)(ききよお)
(Are you listening? Yes, I'm listening.)
b. その話は聞いている(よ)。(聞いとるよ)(きいとお)
(I've heard about that.)
c. 塩が効いている。(効いとる)(きいとお)
(This is strongly flavored with salt.)
- (23) a. 雨が降っている。(雨の降りよる)(ふりよお)
(It's raining)
b. 雨が降っている。(雨の降とる)(ふっとお)
(It has rained)
- (24) a. あの人は肥っている。(肥りよる)(肥りよお)
(He is getting fat)
c.f. a')あの人は最近肥ってきている。(肥ってきてよる/お)
(He has been getting fat)

b. あの人は(最近)肥っている。(肥つとる/お)

(He has become fat)

c. あの人は肥っている。(肥つとる/お)

(He is fat)

但し、分類だけでは(居る、要るの「いる」も共有する、単なる状態の場合もあるので)テイルとルの分布は定かには見えてこない。そこで、先ず、工藤の分類でいうの意味のテイル表現(本稿では動作の途中とする)と英語の進行形との比較から始め、テイルとルの役割分担を考えてみたい。

3.1. 単純形/進行形とル/テイル

古川(1994:170)は、テイルと進行形の違いについて、テイルは永続的な動作・状態を表すことができるのに対し、進行形は一時的な動作・状態しか表さないと説明し、(25c)を非文として挙げている。

(25) a. その川は町の中心を{ ?流れる / 流れている }

b. The river flows through the center of the town.

c. *The river is flowing through the center of the town.

(*は吉川:1994)

川の位置という変化のないイメージを、進行形で表現するのは確かに不適切で、英語では(25b)の様に単純形で表現する。それが、(25a)の普通の読みでもあろう。しかし(25c)の文自体は、必ずしも非文ではない。川の流れを目、又は指で追いながらみえる動きをイメージしている場合には、十分容認可能な文である。(25b,c)は、もともとはDowty(1975:583)の例文であるが、Dowtyも(25b)は地理的形状を表現し、(25c)は例えば洪水で溢れる様に進展している様子だと言っている。吉川の説明では、後のところで(26)の様な例文が補足されており、位置や場所表現に限った場合の現象記述としては、吉川の説明自体は、必

ずしも誤りとは言えない。だが、違いの原理の説明としては、誤解を招きかねない書き方になっていると言わざるを得ない。

(26) a. 学校は丘の上に{ ? 立つ / 立っている }

b. Our school { stands/*is standing } on the hill.

(27) a. The earth is revolving around the sun.

b. The earth revolves around the sun.

例えば、(27a)の描く状況は、永遠とは言わないまでも、学校という、人間の建造物が立っている期間よりはずっと永続的で、とても一時的とは言えないが、進行形でも全く問題はない。前章で見た様に、動き(時間の流れにおける変化)を表しているからである。それに比べ、(27b)の様に単純形で表現すると、動きの在り方、規則性として捉えられ、その規則性の終焉等の変化が意識されないイメージが表される¹⁰⁾。

(28) a. Bill is standing in the doorway.

b. Bill stands in the doorway.

(29) a. The Pennines lie to the east of Manchester.

b. The Pennines are lying to the east of Manchester.

(28a)は生きて動き回る人間が、動きの途中たまたま一時的にそこに立っているイメージの表現であり、(28b)の様に言えば、Bill は例えば銅像か何かの様な、自分では動かないものを指しているか、Bill の仕事がドアマンか何かで、いつもその場所に立っている場合等が思い浮かび、恒常性の表現となる。山脈

10) (吉川：1994：173)では()も、テイルが()の進行形部分に対応しない例として挙げられているが、この場合は *lying* や *sitting* を使って、ただの *be* 動詞では表せないイメージを表現しているだけなので、テイルが進行形に対応できない例とは一概には言えないように思う。

() The socks { *lie/are lying } under the bed.

() Your glass { *sits/is sitting } near the edge of the table.

() 靴下はベッドの下にある。(例えば「置かれているよ」ともいえる)

() 君のグラスはテーブルの端っこにあるよ。(吉川：1994：173)

は動かないから、そのイメージは通常(29a)の様に表現されるが、(29b)も非文ではない。Croft は漫画の山が動いている場合を例に挙げているが、遠くにある稜線を、右から左へと目で追い視線が動けば、山自体は動かなくても、変化が認識されるので、そのイメージの表現としても可能である。

更に standing については、主語が銅像であっても可能である。例文(30)からも分かる様に、とにかくどこかに動かそうと考えていて、暫定的にそこに置いてあるという場合である。これは一時的と言ってもよいが、動きの途中の宙ぶらりんな状態であって、この状態が永いか短いかは問題ではなく、動かそうという変化の意識が問題なのである。

(30) The statue of Tom Paine is standing at the corner of Kirkland and College (and nobody thinks the deadlocked City Council will ever find a proper place for it). (Goldsmith and Woisetschlaeger: 1982: 84)

さてここで、テイルの方に話を戻すと、そもそも、「その川は町の中心を流れている」や「学校は丘の上に立っている」のテイルは、工藤の分類で言うの「変化の結果の状態」の意味が優勢で、「動きの途中」の意味は劣勢なので、単純に進行形と比べるとは適切ではない¹¹⁾。テイルが“永続的でも構わない”のは、変化の結果の状態や、単なる状態(e.g. 「似ている」等(He resembles his dad))の意味で使われ、状態の終焉を感じさせないものだからである。少くともそう言った方が、説明としては混乱を招かない様に思う¹²⁾。変化の途中又は後の両方の状態を表すからこそ、テイルは永続的だろうと一時的だろう(最近早く寝ている、等)と動きの意識があろうと(犬が走っている)なかろう

11) 1)の意味のテイルならば、進行形と、動作・変化の途中という意味を共有しようと思われる。「建っている」等の場合、1)の意味、即ち動作の途中を表現するには、テイルの他に「何々しつつある」「しているところだ」「建設中」など守備範囲の少し異なる様々な他の表現が存在し、曖昧さを補っていると思われる。というのも、九州の方言では形が違うので、変化の途中の意味で、「あっ立ちよる(お)」とか「角んとこに2階建ての家の建ちよる(よお)よ」等と言い、曖昧性は生じないからである。

(その銅像は駅前に立っている)と使用可能なのである。

とは言え、テイルは何にでも使えるという訳では勿論ない。日本語で、テイルが接続できないのは、存在状態の意味での「いる」や「ある」等、日本語では非常に少ない、ル形のまま imperfective な事態を表す動詞である。金田一(1976)も、状態動詞にはテイルは接続しないと述べ、「彼は英語ができる」の「できる」を状態動詞としている様に、この場合の「できる」は imperfective で、テイルは接続できない。無論、「できる」は常に imperfective とは限らず、perfective な「作られる」の意では、「工場で餅が今どんどんできている」の様に、テイル接続が可能である¹³⁾。このような事から、imperfective な意味の動詞にテイル形が接続しないのは、英語の進行形で、imperfective な意味での動詞が be + V-ing の V の位置に生じないのと、同じ様な理由によるものではないかと考えられる。即ち、テイルを、工藤の分類で言う、の「動作の途中の意味」で使う場合、英語の進行形と同様、変化の途中の視点から変化を捉える為に、perfective な事態をテイルという状態動詞に接続して、状態化(imperfectivize)するデバイスではないかと考えるのである。何故状態化するかというと、これも進行形の場合と同じく、現時点等の点的な視点から、事態

12) 注13参照。「建つ」という動作の途中の意味ならば、英語でも There is a 2 storied house being built at the corner と進行形になる)、勿論「その地区では学校がどんどん建っている」等、主語が複数で建つという変化が反復していれば、反復的動作全体の変化の途中の意味が出てくるし、動作の位置を表す「で」等で「丘の上で(今)学校が建っている」等と場所を指定すれば、一つの建物の建設途中という意味がでてくる。標準語の「死んでいる」も普通は「変化の結果の状態」の意味でしか使わないが、「アフリカのある地域ではエイズで人がどんどん死んでいる」の場合、反復動作を一纏まりとした一現象の途中の意味が出てくる。九州の方言では「(魚の)死による」で死ぬという変化の途中、つまり、瀕死の状態、He is dying の意味を表す。

13) 他にも瞬間動詞的(生じる、完成する)な意味での変化の結果として「夕御飯ができている」も言える。九州の方言では、会議中、試合中等行われている意味で「{会議/試合}があつている(会議/試合のありよる(お))」、と言えし「番組/試験/火事/卒業式のありよる(お)」等と言う。この表現が中国・四国の西部以東の地域では全く受け入れられないことが信じがたいくらい自然な表現である。この場合、「ある」は勿論、imperfective ではなく、動きがある活動(perfective)として範疇化されているのである。

を表現する為であろう。それに対し、もともと imperfective である場合、その状態は既に継続途中である。従って更にテイル形を使う意味も必要もない。imperfective は変化がないので、生起している間、どの点で見ても同じであり、点でも幅のある期間でも、全貌を捉えることが可能だからである。

前述した様に、英語には単純形のまま、actual で imperfective な事態を表せる動詞が沢山あり、Our school stands on the hill の stand も imperfective だが、「学校は丘の上に立っている」を構成している「立つ」の部分は、perfective である¹⁴⁾。「学校は丘の上に立つ」というのは、大臣の信念や方針の表明としては可能だが、実際の「立地の現状」の描写ではない。「立つ」の場合、後に触れる様に、「学校は子供がいる所に立つ」とか「40にして立つ」等の様に、一般性等を表す (non-actual, or structural で) imperfective な意味か、未来の実現を表さない限りは、ル形では不自然である。テイルが接続し「立っている」という形になって、初めて英語の(28b)の stand に対応できるのである。

他の (actual な) 動詞の例で考えてみると、「似る / 知る」は基本的に perfective で「似てい / 知らない状態」から「似て / 知っている状態」への変化の部分を表し、変化の後の意味で「テイル」を付けないと、「彼は父親に似ている / 知っている」という様な actual な「状態」は表せない¹⁵⁾。変化の途中の意味にならないのは、これらの変化の途中の時点から、変化を意識することは通常ないからではないかと思う。「男の子は母親に似る (ものだ) / 病気になると健康の有り難みがわかる」といった一般論的表現では、その内容事態はある程度普遍的に成り立つという (structural な) 意味で、変化がないので、その場合の「似

14) ここで actual と言っているものは、後に登場する structural に対立する概念で、structural が、いくつかの事態を束ねてその中の共通性と言った抽象的な性質を表すのに対し、actual は実際の一纏まりの事態を指す。

15) Nakau(1976 : 422) は、「知る、持つ、似る」等を stative としているが、actual ではこれらは皆変化を表すので、perfective と考えるべきであろう。

る」や「分かる」は imperfective であり、だから、現在時点で認識可能である。

「思う」は状態動詞で、境界線を意識しない、actual な imperfectivity を表す。それを「思っている」と言うと、「取りあえず考えていること」で、思考という perfective な脳の働きの途中の意で、一時的なニュアンスがある。従って「思っている」を構成している「思う」の部分は perfective であり、「思う／思っている」の対象は He lives/is living in Bali や I think/I'm thinking of 等の対照とパラレルであろう。

こう考えてみると、工藤の分類で言う の「変化の結果の状態」や、その延長である の「単なる状態」の場合も、完了後の状態であり、テイルの共通点は、「接続している perfective な事態と何らかの関連のある時点の状態」というところにある様に思われる¹⁶⁾。

以上3.1ではテイルが、英語で言えば進行形のみならず、完了形、単純形で表される状態の一部等、広範囲の意味をカバーしていること、点的な視点では捉えられない動作や変化（つまり perfective な事態）を、その途中や後の視点から表現する為に、状態動詞イルを接続した表現とみなしうると述べてきた。同時に、テイルという形は、perfective に接続するという意味でアスペクトと関るが、ルとテイル形自体は、アスペクト対立を表すのではなく、imperfectivity は、両者の共通部分であることを検証した。

3.2. 二つのレベルの imperfectivity: structural vs. actual

以上のところで、ルとテイルの共通項については触れたが、では、違いは何だろうか。まず、ルノテイルの差が直観的に出る例、例えば、先程の吉川

16) 英語の完了形の場合の過去分詞は imperfective でも perfective でもいいので、完了形の場合の have は必ずしも imperfectivizer という訳ではないかもしれないが、ある時点で捉えた、何らかの状態であることでは一致している。

(1994 : 170) の例を、もう一度見てみたい。

(31=(25a)) その川は町の中心を{ ? 流れる / 流れている }

吉川(1994)は、例文を挙げているだけで、理由には触れていないが、確かに The river flows through the center of the town の様な、川の地理的形状を言う場合、「流れる」では不自然だ。ではどういう場合であれば「流れる」でも容認可能だろうか？ル形は、英語で言えば、典型的には will が担う様な(32a,b,c) の如き、ある程度実現に確証のある未来の事態や意志や意図、ある条件で起きる事態への確証的推論等も表す¹⁷⁾。

(32) a. これから音楽が流れます。

b. もうじき首相辞任の噂が流れる。(陰謀を仕組んだ人の科白)

c. このボタンを押せば、回路に電流が流れる。(実際の動き)

だから、自治体や領主等、治世の責任者の未来の町の計画構図として、人口的に作り出せる川(があるとして)の位置を打ち出している場合なら、(31)は「流れる」でも容認可能であろう。この場合のルは、現時点以降の無限なので、それより先の点も、時間が流れることによって認識できる変化や展開のある perfective な事態でも、幅のある状態でもいい。従って actual でも structural で

17) これは、英語では will を使う場合で、原理の説明など単純現在形だけの場合の 33d) と一応区別している。

18) 英語と比較する上で面白いのは、英語では、この確実未来の意味の場合、will 等助動詞で表わさざるを得ない。これは、英語という言葉が、既に事態が生起して現実の一部となっている「現実世界」と、未だ現実とはなっていない「未現実」を形式で分けるのに対し、日本語では厳密な形では分けられないということから来ているように思われる。とは言え、ここで言うルの守備範囲は、未来といっても国廣(1976)の言うように、ある程度<確実>、つまり、実現する理由や論拠などの確証がある場合と言ってよく、蓋然性が低ければ「だろう」等が付く必要がある。英語では形では分けるものの、次の(a)、(b)の表現の違いは、(a)の場合は世の中の物事のメカニズムに対する知識であり、(b)はそのメカニズムに沿って、水が沸点に達する変化を頭の中でイメージしている頭の中での動きのニュアンスが加わる等、明確に存在はするが、連続的かつ僅差で微妙であり、これを日本語では形で分けられないことも、そう不自然ではない様に思われる。

(a) The water boils at 100 .

(b) The water will boil when heated to 100 .

も perfective/imperfective の両方が問題なく表わせる¹⁸⁾。

- (33) a. { 明日の正午には / 明日から 3 日間 / 彼はこれから毎日 } 家にいる。
 b. 彼は { 明日 / 明日から 3 日間 / これから毎日 } 来る。
 c. 太陽は50億年後終焉を迎える。(c.f. 50億年前地球は生まれた。)

次に、話を現在時点において、既に現実として当てはまっている場合に限って考えてみると、(34)の様な、物事の仕組や法則性など、何らかの一般性を表す場合等が思い付く。

- (34) a. 水は低きに流れる。
 b. 風が吹けば桶屋が儲かる。
 c. 時期を逸した商品は安売り店に流れる。
 d. このボタンを押すと回路に電流が流れる。(原理)

これは何故かと言うと、一般性というのは、ある程度時が流れても一定で成り立ち、基本的に imperfective だからである。この様な文は、個々の実際の動作を直接表しているのではなく、それらを束ねた集合に見られる、一段抽象的な性質を表している。主語の範疇集合全体に共通又は一般に当てはまる性質や法則性、又は特定の主語の性質や行動の規則性等、世の中の物事の仕組やあり方に関する話者の知識を表す文であり、ある時が流れても一定であることに意味のある文なのである。従って、世界の在り方を決めたり作り出したりできる権限や能力を持った神様の台詞なら、「川は町の中心を流れる」も現時点の世界のあり方として可能であろう。この様な一段抽象的な imperfectivity を structural と呼んでおく。従って(31)が「流れる」では不自然なのは、基本的には動作を表す動詞がル形の場合、structural な意味が、確実未来かのどちらかしかなく、この文だけではそのいずれの意味も想起しにくいからだと言えるだろう。(35)の様に文脈を整えればありうる。

- (35) a. この地域では多くの領主が城と町を川辺に建設する方針をとったの

で、この辺の川は町の中心を流れる。

structural に対をなすのが、実在する具体的な川の地理的形狀の様な actual である。例えば「彼は痩せている」というのも、「具体的で現実を実現している」actual な事態である。それに対し、「摂取カロリーより消費カロリーが多ければ、人間は痩せる」というのは、誰かの具体的な状態や1回こっきりの動作ではなく、過去から未来にわたり変ることなく、勿論現時点にも、当てはまる一般的なメカニズムとして、structural である。structural なものには、例えば、要旨、手順の説明や指示、歴史的現在等の表現がある。幾つかの事が集まった、一纏まりの事柄の、構成や順序を問題にする場合、構成や順序自体は、時が経っても一定であるので、やはり一種の状態であり imperfective である。だから、「痩せる」という動詞の表す基本的なイメージは変化でも、structural な意味で使われると、imperfective であり、現時点で捉えることができるのである。

勿論その様な structural な事態にも、終焉等の区切りを意識することは可能であり、そうすると perfective なので、その事態の途中の状態ということで、テイルが用いられることもある。例えば、ある習慣的現象の途中の時点を描く場合である。

(36) a. 前は与作は木を切っていたが、最近木を植えている。

(c.f. 与作は木を切る)

b. 最近毎日6時に起きている。(c.f. 僕は毎日6時に起きる)

これらは、英語の My cat is stalking birds these days(c.f. My cat stalks birds) 等と平行である。

ところで、ルの imperfectivity とテイルの imperfectivity の違いは何だろうか？テイルも、全体としては結局状態(imperfective)であるから、その最終の状態自体には、明確な境界線の意識はない筈である。しかし、「変化の途中や後の状態」や「境界の感じられる状態の途中の状態」を表すというこ

とは、その変化、即ち perfective な事態の意識が織り込まれているので、複合物のないルの表す状態より相対的に一時的な感じが、付加されるのだろうと思われる。structural なルにしても、同じことであろう。

- (37) a. { 明日の正午には / 明日から 3 日間 / 彼は毎日 / 彼は今 } 家にいる。
 b. 彼は { 明日 / 明日から 3 日間 / 毎日 / これからも毎日 } 来る。
 c. { 今 / 明日の正午には / 最近毎日 } 彼は来ている。
- (38) a. { 昨日の正午には / 元旦から 3 日間 / 彼は毎日 } 家にいた。
 b. 彼は { 昨日 / 元旦から 3 日間 / 毎日 } 来た。
 c. { 昨日 / 昨日の正午には / それから毎日 } 彼は来ていた。

4 . ル、夕、テイルの総括と比較

以上、ここで議論してきたことは、あくまでル、夕、テイルの大筋である。英語の単純形、進行形、完了形との比較も概略に留まる。完了形にはテイル形だけでは対応できない細かな英語独特の用法や意味があるし、それに応じて日本語も様々細かにニュアンスや意味機能の異なる様々な表現がある。日本語では区別の出てこない部分を、英語では様々に表現仕分けするという部分もある。しかしながら基本的イメージについては、従来の解説よりは明らかになった部分があるのではないかと思う。

ここで、ルと夕、夕とテイル、ルとテイル、のそれぞれについて、共通点と相違点を纏めておきたい。まず、ルと夕は、動詞の全体像を、ある視点から方向を記述対象とする点で共通し、それぞれ図 5、6 に示す様に、ルが事態を途中から又は前方にイメージさせる <現時点以降指向>、夕が <後方指向> という点で異なる。英語の現在形や過去形との違いは、ル／夕では、発話時点を軸とする必要がないところにある。だから、ルが過去の場合もあり得るし、夕は、未来や仮定等の未現実 (e.g. 「死んだら、あの丘に埋めてくれ」)、又は非現

実 (e.g. 「子供の頃に戻れたら」) の場合もあり得、事態の全貌が後方にある (つまり実現している) イメージを表現する。



図 5

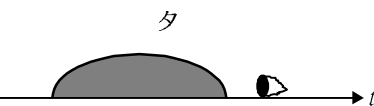


図 6

タと変化の結果状態のテイル は、表す事態と視点との位置関係が図 7、8 に示す様に共通である。「死んだ」と「死んでいる」や「髭をはやした (男)」と「髭をはやしている (男)」の共通性は位置関係の共通点によると思われる。違いは、タが後方に見える事態そのもの (太線部分) に焦点が当たっているのに対し、テイル は変化の後の状態 (又は、視点の在る、或る時点) に焦点があるという点にある。

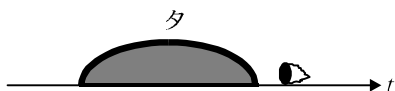


図 7

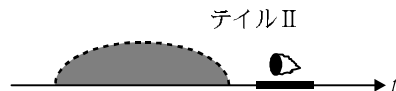


図 8

actual であつ imperfective のルと structural のル、それとテイルは、いずれも imperfective であり、点で捉えられるという共通性がある。違いは、ルが、状態という、動詞の全貌であるのに対し、テイルは接続する動詞の途中か後の視点での状態という点にある。ある一時点から perfective な動作・変化を捉えるには、状態と結び付く必要があり、それがテイルの存在意義でもある。

ルには、現時点の場合と確実未来の用法があるが、現時点用法は、いずれにしても imperfective しかありえない (actual 「今居る」 structural 「毎日来る / 毎日居る」)。それに対し、確実未来用法ではタの場合と同じく actual/structural いずれの場合も perfective/imperfective の両方が可能であり、点的でも幅があつてよい。

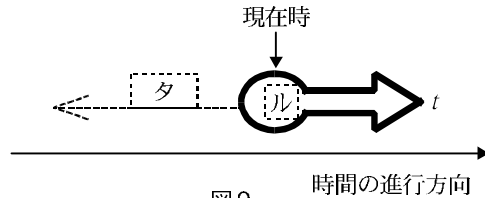


図9

- (39) a. 彼は (明日来る / 居る、明日から毎日来る / 居る、明日の12時に来る / 居る、明日は一日中勉強する / 居る)
 b. 彼は (昨日来た / 居た、元日から毎日来た / 居た、昨日の12時に来た / 居た、昨日は一日中勉強した / 居た)

こう考えてみると、英語の単純形 / 進行形 / 完了形、日本語のル / タ / テイルのそれぞれの形が表す概念には違いがあり、複雑な様に見えるが、いずれの現象も、perfective は1点では捉えられないという原理に支配されていることが解る。perfective/imperfective という概念対立は、日本語の形式にそのまま帰される性質のものではないにしろ、動詞の意味と形の間を捉える上でも有効だということは言えるだろう。

以上の事から、冒頭の「わかる」に例を取ってみると、この動詞には、「知る」等とは違い、actual でも perfective と imperfective の両方の意味がある事が解る。imperfective の方は、理解とか識別能力がある場合など、現状について言う場合である (e.g. (僕も同じような経験をしたから) 君の気持ちすご

く解る、(あの人は絶対音感があるので)ドの音がわかる、等)。perfective の方は、「知る」や learn に近い、「解らなかつた状態から解っている状態への変化」を表す。こちらが、冒頭の「あっ解った」や「あの時あの問題の解き方が解った」の「わかる」の後方指向の場合である。それから、「解ったら帰りなさい」や「今にわかる」等の確実未来、「人は病気になってみて始めて健康の有り難みがわかる」等の structural な imperfective がある。「解っている」は、方言では(「わかりよる?」等)理解という変化の途中の の意味もあるが、標準語では基本的には変化の結果の状態 の方であろう。「君の気持ち解っているから」というのは「理解できる」と同情の意を表すのではなく、理解している状況を言っているだけである。

5. むすび

英文法の理解が、主に英文を日本語に訳す為だけに必要だった時代には、日本語のルやタの意味等をそれ程真剣に議論する必要はなかつたかもしれない。だが、本当に使う為の英語を教える場合や、あるいは日本語を外国の人々に理解してもらう為には、きちんと捉えておく必要があるだろう。本稿は、そう考えて日本語のル、タ、テイルに関するいくつかの文献に目を通し、感じた疑問の解消を試みたものである。

纏めると、本稿では1)ルとタは事態との関係における視点の方向性を表すマーカーであり、視点の位置については指定がなく、発話時とは限らないこと、2)事態を後ろ向き、つまり成就を表すのがタで、昨日の事は後ろにあるからタであること、3)現状把握と、目算があり確実と思われる未来とをル形が担い、ルは現時点を含む現時点以降を指向していること、4)未来と過去は無限の線なので、perfective でも imperfective でもイメージ可能だが、点では perfective な事態は捉えられず、現在は点なので、imperfective しか捉えられ

ない。従って、テイル形は、そのままでは点では捉えられない perfective な事態を、途中や実現後の視点（現時点、又はそれ以外のある点）から表すデバイスで「イル」と結び付いて途中又は後の状態を表すこと、5）従って perfective/imperfective という概念の区別は日本語の現象を考えるにも有効であることを述べた。

時制というもののユニバーサルな定義が未だはっきりしていないので、日本語のルやタが時制を表すかどうかは議論できないが、ルやタは、英語の時制と同じ意味では時制ではないことは明らかである。認知文法で描かれる英語の時制のイメージが、話者の時空的位置を中心として発話者との関係における事態の位置を示すという具合に、英語では個人（発話者）が中心であるのに対し、日本語の場合、事態が中心のイメージになるのは、個人というものが重視されているので主語が抜け落ちることは稀な英語の様な「する言語」と、「誰が」ということを、文の形成上それ程重要視しない日本語の様な「なる言語」の違いから来るものであろう。

参考文献

- 荒木一男・小野経男・中野弘三（1977）『助動詞』（「現代の英文法」9）研究社出版
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect : An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Croft, William (1998) "The Structure of Events and the Structure of Language," in *The New Psychology of Language-Cognitive and Functional Approach to Language Structure*, Michael Tomasello (ed.), Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, London. 67-92.
- Dowty, David R. (1975) "The Stative in the Progressive and Other Essence/

- Accident Contrasts”, *Linguistic Inquiry*. 6, 579-88.
- Goldsmith, J. and E. Woisetschlaeger (1982) “The Logic of the English Progressive,” *Linguistic Inquiry* 13, 79-89.
- Harder, Peter (1996) *Functional Semantics A Theory of Meaning, Structure and Tense in English*. Mouton de Gruyter, Berlin · New York.
- Higuchi, Mariko (1995) “Static Image and the Present Tense in English,” *Bulletin of the Faculty of Computer Science and Systems Engineering, Kyushu Institute of Technology* 8, 67-100.
- (1998) “The Simple Present Tense Used as Historical Present in English,” *Bulletin of the Faculty of Computer Science and Systems Engineering, Kyushu Institute of Technology* 9, 59-94.
- (1999) “The Role of Functional-Interactive Tools in Describing Tense in English,” *English Linguistics* 16.1, 184-209.
- 金田一春彦(1976)「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』5-61 むぎ書房(『言語研究(1950)15号より採録)
- 工藤真由美(1982)「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』第13巻4号51-88.
- (1982)「シテイル形式の意味のあり方」『日本語学』第一巻第2号、38-47.
- (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト - 現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 国廣哲彌(1967)「日英両語テンスについての一考察」『構造的意味論』三省堂43-90.
- Langacker, Ronald W. (1987a) *Foundations of Cognitive Grammar vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford UP, Stanford.
- (1987b) “Nouns and Verbs,” *Language*, Vol. 63, No.1, 53-94.

- (1991a) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford UP, Stanford.
- (1991b) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter.
- (1996) "A Constraint on Progressive Generics," *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. by Adele E. Goldberg, 289-302, CSLI Publications, Stanford, California.
- (1997) "Generics and Habituals," *On Conditionals Again*, ed. by Angeliki Athanasiadou and Rene Dirven, 191-222, John Benjamins, Amsterdam.
- (1994) "Generics and Habituals," Ms., University of California, San Diego.
- Mittwoch, Anita (1988) "Aspects of English Aspect: On the Iteration of Perfect, Progressive and Durational Phrases," *Linguistics and Philosophy* 11, 203-254.
- 中右実(Nakau, M.)(1976) "Tense, Aspect, and Modality," in *Syntax and Semantics*, Vol. 5. Academic Press.
- Vendler, Zeno(1967)*Linguistics and Philosophy*. Cornell University Press, Ithaca.
- 尾上圭介(1982)「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』第一巻第2号、17-29.
- 大江三郎(1982)『(動詞 I)』(講座・学校文法の基礎第四巻) 研究社出版
- 奥田靖雄(1979)「意味と機能」『教育国語』58号、13-19.
- 高木一広(1993)「認識と発話の過程を考慮した意味記述の試み - 日本語の文末表現「た」を例に - 神戸外国語大学修士論文
- 寺村秀夫(1971)「'タ'の意味と機能 - アスペクト・テンス・ムードの構文的
位置づけ」岩倉具視教 = 授退職記念論文集出版後援会編『言語学と日本語

問題』くろしお出版（『日本語のシンタックスと意味 II』付録313-358 . くろしお出版1984に採録）

吉川千鶴子（1995）『日英比較動詞の文法発想の違いからみた日本語と英語の構造』くろしお出版